

## 2104 離島覚書（長崎県・前島）



奈留島より前島を望む、右端はトンボロで繋がる末津島

令和3年6月22日

### 過疎と高齢化

前島は文字通り奈留漁港（第3種）の目の前に位置し、天然の防波堤の役割を果たしている。奈留の中心地から南へ約2km、奈留神鼻のある半島と数100mの水路を隔てるだけなので、泳いでも渡れそうな距離だ。島の面積は0.47km<sup>2</sup>で周囲は5.6kmのタツノオトシゴのような形をしており、隣の末津島とはトンボロで繋がっている。島の北半分には海岸沿いの道路が整備されているが、反対側は岩礁海岸が続く。海岸沿いに猫の額ほどの僅かな平地があるだけで、全島が山で覆われている。

2015年国勢調査時の世帯数は12戸、人口は23人で高齢化率は65.2%に達していたが、それから6年を経た今日ではさらに高齢化率が高まっていると考えられる。現在、前島の就業者は1人で、奈留島にある恵比須丸というまき網に乗っている。それ以外は仕事を持たない高齢者である。

島のピーク時の人口は300人ほどだったというが、1957年の時点で221人が住んでいた。高度経済成長期に若い人は相次いで島を出ていき、2003年には50人に減ってしまった。

前島へは市営渡海船（民間の船をチャーター）が1日3便運航されている。ただし2、3便は客が少ないことが多いのでデマンド運航、つまり事前の予約が必要である。このため事前に市役所の現地事務所に電話し、予約しておいた。なお、後述するように人家は島の北側に分散しているので、船は港のある笠松と江ノ浦の2ヶ所に泊まる。

島には商店も自動販売機もないから、奈留ターミナルの売店で弁当とお茶を買って船に乗り込んだ。乗客は私を含めて6人、このうちの2人は島に住んでいた母親が亡くなり、葬儀のために戻っていた人で、愛知県と福岡県に住んでいるといていた。6人のうち4人が

笠松で下船し、2人は江ノ浦に向かった。船員によると、現在前島に住むのは笠松地区5戸、江ノ浦地区4戸、牛落地区2戸の11戸という。ちなみに牛落地区は笠松と江ノ浦の中間に位置する。

奈留ターミナルを10時45分に出発した市営渡海船は、10時52分に笠松に着いた。料金は150円であった。港の近くに島内で発生したゴミを収納する箱があり、ビニール袋に入ったゴミが船員らの手によって船に積み込まれた。カラスが多いためかゴミ箱は嚴重に蓋が取り付けられている。



民間の船をチャーターした市営渡海船（左）、保管してあったゴミを船に積み込む乗客と乗組員（右）

## カクレキリシタン

五島藩<sup>もりゆき</sup>主盛運（1753～1809）は家督を継いだ年に大虫害で大きな農業被害を受けたことから大村藩からの移住を奨励し、農業開拓に当たらせる政策をとった。1797（寛政9）年に島内開墾のために大村藩主純尹<sup>すみこれ</sup>に領民の移住を乞い、外海地方から五島列島への農民の移住が始まったのである。大村藩は藩主純忠<sup>すみただ</sup>（1533～1587）がキリシタン大名であったことから、領民にキリシタンとなった者が多かった。1644年に禁教令が出されると彼らは潜伏キリシタンとなっていた。大村藩のキリシタンへの取り締まりは厳しく、しかも極端な産児制限（男子は長男以外は殺させたという）が行われたため、五島列島への移住は歓迎され、一方五島藩では農地の開墾によって農業生産の拡大が期待されたので、両者の思惑は一致した。五島列島に以前から住んでいた人々は「地下<sup>じげ</sup>」と呼ばれ、条件のいい場所に住んでいたが、「居着<sup>いつま</sup>」と呼ばれた外海からの移住者は条件の悪い土地に住まざるを得なかった。それでも外海で生活するのに較べれば別天地であったのである。

前島はこうした外海の移住者によって開拓された島だった。前島には地下はおらず、無人だった島に1800年前後に開拓民が入植したのである。今から220年ほど前のことであった。

外海から来た入植者は全員、潜伏キリシタンであった。そして前島の潜伏キリシタンは明治維新後の1873年に信仰の自由が認められた後にも、再渡来したカトリック教会に戻ることなく、カクレキリシタンとして存在していた。カクレキリシタンの研究に長年携わってきた宮崎賢太郎は、「カクレキリシタンとは、キリシタン時代にキリスト教に改宗した者の子孫である。1873年禁教令が解かれ、信仰の自由が認められた後もカトリックとは一線を画し、潜伏時代より伝承されてきた信仰形態を組織下にあって維持し続けている人々を指す。オラショや儀礼などに多分にキリシタンの要素を留めているが、長年月にわたる指導者不



在のもと、日本の民俗信仰と深く結びつき、重層信仰、祖先崇拜、現世利益、儀礼主義的傾向を強く示すものである」と定義している。そして、「現在のカクレキリシタンはもはや隠れていなければキリシタンでもない。日本の伝統的な宗教風土の中で年月をかけて熟成され、土着の人々の生きた信仰生活のなかに完全に溶け込んだ、典型的な日本の民俗宗教のひとつである」としている。

奈留島の集落の中でこのカクレキリシタンが最後まで残っていたのが前島であった。前島のカクレキリシタンの組織は1995年に解散し、信徒たちは神道一本となった。解散当時、前島には35世帯83人が住んでいたが、このうち元帳（メンバー）は26世帯63人であった。残りの9世帯ももともと元帳であったから、カクレキリシタン以外は一戸もなかったことになる。

宮崎は、「前島の元帳組織は帳方―水方―<sup>しぐろ</sup>宿老の3役と一般信徒の『フレシタ』からなっている。三役を総称して『ジンジドン』という。前島の組織でおもしろいのは、宿老には帳方付きの宿老があり、後継者もそれぞれ宿老から選ばれるということである」と述べている。

注) 宮崎は「1644年より1873年のあいだの、キリシタンであることを隠し、仏教徒であることを強いられた潜伏時代の信徒を『潜伏キリシタン』と呼び、1873年以降信仰の自由が基本的に認められたのち、幕末に再渡来したカトリック教会に戻った人々を『復活キリシタン』、その後も潜伏時代と何ら変わることなく寺や神社との関係を持ち続け、現在に至っている人を『カクレキリシタン』と呼んで明確に区別することを提唱したい」としている。

前島の元帳は四半世紀前に解散し、島民の多くは個人の生活を重んじ、島外に移住した。島には立派な墓が残されている。集団の墓地はなく、単独ないしは2～3基の墓が並ぶ。



カクレキリシタンの墓

## 笠松

夜行のフェリーで奈留島に到着し、朝食を食べていなかったため、粗末な待合室で購入してきた弁当（ハンバーグ弁当）を食べた。これが早めの昼食になった。

笠松の漁港には漁船が2隻係留されているだけだった。港の近くに鉄筋コンクリート平屋建ての前島集会室が置かれている。公的な施設はこれしかない。もともと小学校はなく、島の児童は奈留島に通学していた。また郵便局も病院も、商店もない。自動販売機すらないので現状だ。

笠松地区は港の南側背後に比較的広い平地があり、ここに10軒ほどの家がかたまっているが、人が住む気配のある家は3軒ほどにとどまった。海岸道路に面した家には石垣の塀が

築かれている。家の周りには自給用野菜を作る畑があるが、小砂利が混ざるひどい土地だった。人家の背後には山が迫る。古い写真をみると、山の上まで段々畑が続いていたようだ。

海岸沿いの道路を南下すると行き止まりあたりに2軒の家があった。白い犬がさかんに吠えてくる。

道を折り返して牛落鼻に向かう。道路際には古い石垣が見られ、今は藪に覆われているが、かつて人家があった往時が偲ばれる。



道路の行き止まり当たりの2軒の人家（左）、石ころだらけの畑で栽培されているサツマイモ（右）

## 牛落

笠松から牛落を経て江ノ浦に至る道路は崖の下の岩礁海岸につくられたものである。道路にはガードレールが取り付けられていたが、度重なる波浪で破壊され、吹き飛んだガードレールの残骸が岩場に放置されたままであった。

道路が建設されたのはそれほど古い話ではないので、長い間、島の集落は孤立していて、集落間の移動はもっぱら船を利用していたと推定される。

牛落鼻には3軒の家があった。このうち2軒に人が住んでいるようだ。家の前には一本の短い防波堤が伸びるだけで、港としての体をなしていない。船は1隻もなかった。家の裏手には小さな菜園があり、笠松と同様、サツマイモが植えられていた。

菜園の周りにはネットが張られている。おそらくカラス対策のためのものと思われる。頑丈な柵で囲っていないところをみると、前島にはイノシシは生息していないのだろう。



ガードレールがなくなった海岸道路（左）、牛落の人家（右）



## 江ノ浦

牛落鼻を回った先の比較的深い入り江が江ノ浦である。東側に突堤が一本伸び、港の前にはハの字に防波堤が作られている。湾の東側にはどういいうわけか階段護岸がつくられている。港内には漁船1隻、船外機7隻が係留されていた。

江ノ浦の入江に沿って10軒ほどの人家が並ぶ。江ノ浦は前島の中では最も人が多かったにちがいない。このうち湾の奥まったところにある人家2軒には今も

人が住んでいるようだ。波あたりが強かったと思われる人家の前には高さが2m以上もある石垣の塀がつくられている。また人家の前にツワブキがまとまって植えられていることから栽培して出荷されていたのではないだろうか。

人家の背後には山が迫る。居付の人々はこの山を開墾し、段々畑を作り、半農半漁の生活をしてきた。現在はもとの山林に戻り、当時の状況をうかがい知ることができない。当然山に登る道もなくなってしまった。道路を歩いていて目についたのはアオスジアゲハの群れとユリの花、白と黄色の名前の分からない花だった。この島に果たして自動車が必要だったのかどうか疑問だが、路傍には何十年も前に朽ち果てたと思われる車が放置されていた。

船で一緒だった人たちはみな家の中に入り、外ではだれにも会わなかった。高齢者は家の中に籠っており、全く静かである。やがて人がいなくなり、無人島になるのも時間の問題のように思われる。

前島には神社も寺もないが、立派な墓が目立つ。集落の麓に江上家と書かれた墓地があったが、最初に葬られた人は1901（明治34）年であった。

「福江市史」によると、江ノ浦には奈留の代官であった山口家の分家の山口倫十郎の墓が残っており、墓石の側面には「疱瘡而庵死」の文字が刻まれているという（現地では探したがわからなかった）。奈留島で疱瘡（天然痘）が流行した時に感染が拡大しないように当時無人島であった前島に疱瘡で亡くなった人を葬ったのだった。おなじようなケースは上五島の有川でも見られ、疱瘡で亡くなった人を頭ヶ島の北にある無人島・ロクロ島に葬っている。五島福江周辺で疱瘡が流行したのは、長崎医師会のホームページによると1764（明和元年）とされている。上述したように大村藩の外海から五島列島に開拓民が入り始めたのは1797年のことなので、当時、前島は無人島で伝染病の人を隔離する島だったのである。



大きな石垣に囲われた家（左）、屋根が崩れかかった廃屋、家の前ではツワブキを栽培（右）

## トンボロ

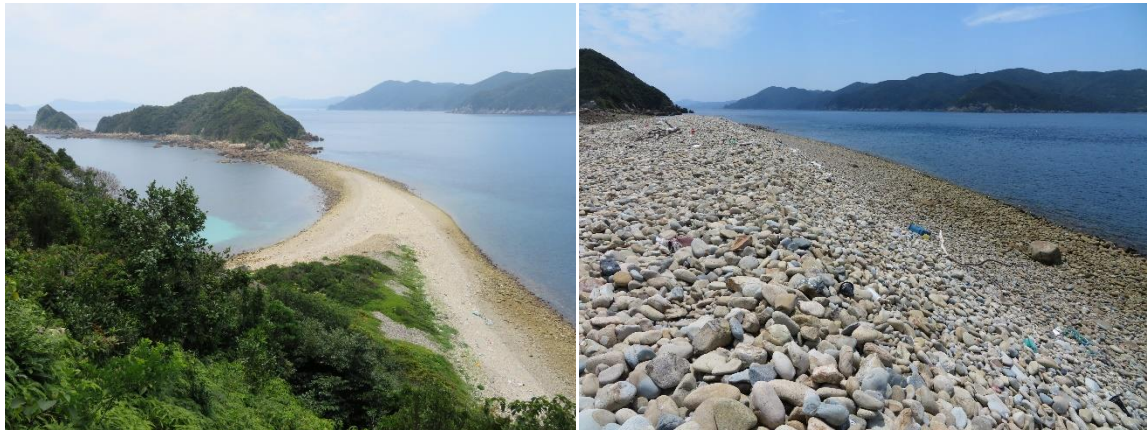
前島の南に末津島という無人島があり、前島と末津島はトンボロ（砂洲）で繋がっている。干潮には陸続きになるから、歩いて渡ることができる。

江ノ浦の集落のはずれにトンボロに行く山道の入口がある。海岸は岩が連なり危険なことから山道が整備されているわけだ。登山口から急な登りになる。廃プラでつくった丸木のイミテーションで階段が作られており、歩きやすい。山側の土手にはカニの巣穴がたくさんあり、アカテガニが棲んでいる。雑木林の間に石垣が残っていることからかつてこの一帯には人が住んでいたか、農地だったことを思わせる。しばらく歩くと見晴らしのいい高台にでた。眼下にトンボロを一望できる場所だ。2基のベンチが置かれていた。ここで少し休憩し、トンボロの写真を撮った。

展望台から先は下りになる。最後の下りは道が直角に曲がり、すごくきつい勾配の坂になった。30度はあるだろう。階段は作られておらず、脇にロープが設置されていた。雨の跡で足が滑るような場合、このロープを伝いながら登り降りすることになる。

トンボロは砂ではなく玉石でできていた。海底でもまれて打ち上げられた石なので全て丸石である。上の方の石は拳大からそれ以下の小さな丸石、下の方の石は人頭大から拳大の丸石になり、上の方ほど石は小さくなる。砂洲上にはプラスチックを中心とした飲料ボトルやアナゴの筒などが打ち上げられ、中にはハングル文字や中国の略字が印刷されたものも目に付く。ただ東シナ海の西海岸にみられるような大量のゴミではなかった。

砂洲の長さは400mほどで、このうちの300mほどを歩き、明日訪れる予定の椀島の写真を撮った。兎に角、歩きづらい。写真を撮ってすぐに引き返した。



末津島との間に形成されたトンボロ（左）、トンボロを形成する玉石（右）

トンボロから13時56分に江の浦の港に戻った。港の奥まったところに市営渡船が発着する目新しいポンツーンが整備されている。船で一緒だった人は家の中に入ったままで、外では誰にも会わなかった。人がいなければ話を聞くこともままならない。船が来るまで1時間ほどポンツーンの近くで待った。

14時50分前に船が到着し、3人が下船した。高齢者の女性と介護の付き添いと思われる男女2人の合計3人であった。渡海船はそのまま奈留島に直行した。

## 【文献】

宮崎賢太郎（2015）：カクレキリシタン、長崎新聞新書、長崎新聞社、長崎、p. 295